

散歩と 手づくりと アートと

20回を迎える我孫子アートな散歩市

令和元年9月7日発行 発行人/太田安則 発行/我孫子手づくり散歩市・我孫子アートな散歩市企画委員会〒270-1147
千葉県我孫子市若松136-11 ホームページ <https://abikoartwalk.wixsite.com/sanpoichi> 定価 500円(本体463円+税)

表紙と裏表紙:ヘレン・ウォルシュ19回展参加作品(手賀沼公園)



散歩と 手づくりと アートと

20回を迎える我孫子アートな散歩市

我孫子アートな散歩市の主旨と概要

太田 安則

我孫子市は、手賀沼・利根川に挟まれた馬の背状の台地に、まちが形成されています。

古くからこの自然環境や台地から川や沼を見下ろす眺望が、思考や創作の癒しの場として、柳宗悦、バーナード・リーチ、志賀直哉、武者小路実篤や杉村楚人冠に代表される文人や文化人に好まれ、社会の新しい考えや創造的活動が、この地で練り広げられてきました。

散歩市は、やすらぎや癒しを与えてくれる景観（ヒーリングランドスケープ）を備えたこの環境で、創造的活動に触れ交流する、新しい意味と価値をもつ文化を生み出そうと試みる市民による、市民のまちづくりです。また関連する催しとも連携し、地域の財産を活かした発表・展示・販売を散歩しながら巡る、我孫子の良さを知ってもらい、地域振興につながる舞台づくりを心がけています。

我孫子駅から手賀沼公園、そして白樺派の中心的活動が開かれたハケの道を辿り、水の館まで、点在する文人や文化人の創作の場を散歩しながら、手づくりの工芸・美術品（陶芸、彫刻、絵画）・農産品・舞踊・音楽散歩などの発表・展示や販売が行なわれる、アートが取り持つ市民交流の場です。

我孫子駅前アビシルベ・けやきプラザ展示会場・アビイクオーレ・千葉銀行・アビスタ・天神坂・天神山緑地・三樹荘・楚人冠公園・杉村楚人冠邸園・雁明緑地・白樺文学館・古墳公園・もみじの丘・旧村川邸・ゲートスポット・水の館のほかガレージや空き地・商店等が主な会場となります。

2020年には20回と回を重ねることができました。アーティストとの交流の場「我孫子アートな散歩市」で白樺スピリットを甘受し育みましょう。

散歩市は「作家と街づくり」の仕掛け

散歩市の活動資金は、作品販売額の10%を提供してもらったシステムにあります。参加総数は40〜50名ほど、そのうちの絵画、彫刻、工芸、手工芸の各作家20名ほどがアビイクオーレと手賀沼公園入口アピスタ前テントを会場として自作品の販売をしています。散歩市は「作家と街づくり」の仕掛けとして発足しました。開催当初は駅南口広いエリアで空き地や多くの店舗協力を得ての展開でしたが、回を重ねるなか要望もあって会場は点在型から集中型に変貌し、また「手づくり散歩市」が「アートな散歩市」に時代の空気を反映して変遷してきました。販売については当初より石橋製糸(株)

アビイクオーレが会場を提供してくれ、市民活動に理解と協力をいただいています。

キャリア・プロフィールもまちな作家たちですが制作の刺激になっていると思われれます。趣旨の一つでもあります。地域や近隣の作家たちを紹介する場であり、身近にアーティストの活躍を感じる場であり、気に入った作品を手に入れる機会が散歩市です。作家の制作意図を聴きながら買い求めるアート作品、ちよっぴり贅沢な喜びとなること間違いなしと思われれます。アートを介してのこうした循環を作り出せたら楽しい素敵なお雰囲気になると思っています。

関谷 俊江

関谷俊江(せきやとしえ) 我孫子アートな散歩市事務局長・造形作家



1・4、アビイクオーレ前後期/梶原みち、せきぐちりつこ、関根恵子、柴田徳美、首藤伸子、谷口陽子、青野幸子、浅見るい、伊藤昌子、大久保方子、小泉伸子、佐藤列子
3・6、アピスタ前広場/音楽散歩、せきぐちりつこ、関根恵子、寺島初江、友野海也、宮川清、横田地みか、いるる
7、水の館ギャラリー/我孫子高校美術部、上田靖子、澤崎静江、清水京子 8、アビシルベ/寺島初江組紐ワークショップ
10、11、アビシルベ/清水京子、中津川督章、宇野克朗 (1~11は第19回我孫子アートな散歩市の各会場風景より抜粋)

2、もみじの丘/音楽散歩
5、千葉銀行我孫子支店/伊藤昌子
9、志賀直哉邸跡/加藤ひろえパフォーマンス

リーチが鷹大工を見いだした眼で

〈造形作家による我孫子の魅力空間の発見と創造〉

中津川 督章

2018年「我孫子アートな散歩市・18」で出品者の一人、マエノマサキさんが、板でつくった大きな椅子をハケの道沿いの公園で4ヶ所に移動展示した。「リーチ先生の椅子」と題された作品である。この椅子の原作が旧村川別荘・新館に所蔵されている。マエノさんの椅子はそれを模したもので、我孫子にとり、バーナード・リーチの象徴的存在、と彼は考えたのであろう。

私は「我孫子アートな散歩市・15」の準備段階でリーチデザインの椅子に出くわすことになった。リーチの陶芸作品は見ていたが、椅子の作品にお目にかかるのは初めてであった。その椅子を見たとき、私は正直違和感を持った。モダンデザインの椅子とはかなり趣きが異なる。脚の形は西欧の伝統的な猫脚風である。驚いたのは、椅子にはまず使うことのない杉材を使っていること。そのうえ、木目を浮き出す焼杉という日本の伝統的な加工を施していたことだった。当初感じた違和感は消え、これはおもしろい、実にユニークだと思った。しかも、その作者が我孫子の名大工といわれていた佐藤鷹蔵（鷹大工）であった。このとき私は、この椅子との出会いで佐藤鷹蔵をはじめて知ることになった。「我孫子市史・近現代篇」のなかに以下の文章をみつけた。1919年リーチの工房が焼失したあとのことである。

我孫子窯名残の作品と家具を出品した神田流逸荘の個展において、リーチは報道用に「家具の試作に就いて」を草し、そのなかに「材料や技量上での選択に就いては出来る限り多く日本の手工業及び手工業の伝統を用いたが、迅速で伶俐ではあるが、西洋の技術や装飾を半分消化し

た所謂「ハイカラ」がしみ込んでいる東京の職人を使うことは避けた。地方の大工は尚一層正直で綿密であるからだ」と柳宗悦の民芸運動に通じる言を残している。

ここに書かれた「地方の大工」とは、リーチの椅子を制作した佐藤鷹蔵のことであることは明らかである。

敗戦後、再来日したリーチが残した絵日記のなかで「日本人は西欧世界への参入を望み、自らの文化遺産を捨てる。」と書いている。敗戦後はそれが特に顕著であった。今でもその傾向は変わらなくて、足元の現実を自分自身の眼で見、感じ考える、ということをや、一斉に同じ方向に走る他人志向性がある。情報社会が更にそれを加速拡大している。

リーチデザインの椅子は、芸術家であるリーチの素直な感性が、日本の伝統的な技術と感覚の持ち主である鷹大工と響き合って生まれた作品である。いわば、リーチの芸術家としての眼が生んだ象徴のような存在である。

アーティストは本来感性の鋭い人、いわば気づきの達人である。この数回「アートな散歩市」の作家達も、我孫子の自然や文化遺産など、作品展示やインスタレーションを通じて、その魅力を顕在化してきた。

「我孫子アートな散歩市」は2001年からはじめられたので2019年で19回となる。（12回以前は「我孫子手づくり散歩市」という催し名）。長く続けられているわりには市外にあまり知られていない。この催しは「我孫子手づくり散歩市」という市民団体が主催している。したがって、今迄は主に我孫子市在住や我孫子市ゆかりの作家の作品発表や、工芸作家の作品販売を目的に続けられてきた。どちらかといえば内輪向きの催しであった。それが市外における知名度の低かった理由であろう。



マエノマサキ18回展参加作品。楚人冠公園での展示の様子。



旧村川別荘新館に展示してあるリーチによるデザイン、佐藤鷹蔵製作の椅子。

しかしこの数年、市の文化財施設の使用などを含め、リーチの眼のような我孫子ならではのオリジナルな魅力の発掘が作家達によってなされつつある。16回展、17回展時の「アートに親しむ魅力空間の発見と創造」等の記録文がそれである。しかし、これ等は極く少数の内輪向きに配布されたので、展覧会を見に来て下さるお客さんは知らない。そこで20回展に向けて、この冊子をもって広く知らせることになった。

16回展 交差点のキリン像 島田忠幸

キリンの作品が展示（設置）されることになったのは「親水広場」という公園の端、交差点脇である。

島田さんの動物をテーマにした作品では犬が有名である。「雨引の里と彫刻」展でも何回かお目にかかっているし、15回展では杉村楚人冠邸園に展示された。それは犬の本体を造形している作品ではなく、犬が鎧を着用したらこういう姿である、という鎧のみの造形である。犬の体は無いが、見えない犬の動きを実にいきいきと感じさせる。

最初アルミの金属色だった鎧が、その後迷彩色の布に覆われた。風景の中で消えて見えなくなる作品を作りたかった。」という作者のコメントがある。(AMABIKI2006)。犬を消した上に鎧も消したかったのか。それでも完全防護服のみの不思議な造形で、存在感が強い。私は、生命体の消えた鎧同士が戦うという、恐ろしい戦争のイメージを感じた。

今回設置のキリンも先の犬と同じように鎧のみのキリンである。しかしこの鎧の表面は迷彩色でなくキリンの毛並み模様である。しかも長い首だけの造形。したがって犬ほど鎧そのものを感じさせない。金属板を叩いてつくる鎧型造形様式とでも呼ぶべきものに变化している。私の主観かもしれないが、これには犬の様な不気味さはない。「見上げればアフリカ」というタイトルで、美しい日本の自然のなか（雨引の里）にあっても違和感はない。

ともあれ、「アートな散歩市」でこのキリンの設置された場所は、車や人が柏方面から手賀大橋を渡って我孫子につく最初の交差点脇である。その交差点の名前は「我孫子若松」交差点となっているが、そう呼ぶ人はほとんどない。そこにアフリカのサバンナを象徴するキリンの像がある。キリンという動物と、その置かれた場所の意外性で、一度見た人は忘れまい。そう、「キリンの交差点」が出現したのである。

野外彫刻がどれほど社会に役立つか、を考えたとき、モニュメント以外の何があるだろうか。このキリン像ははからずも交差点のメルクマール（目印）としての役割をもつことになった。しかもすばらしい鎧型造形作品である。彫刻のこういう生かし方を今まで誰も気づかなかったようである。

無茶を承知で書けば、私はいつそのこと、昔、交通整理のおまわりさんが立っていた交差点の中央部に高く設置すれば面白いと思う。鎧のみのキリンだから排気ガスに強い。そうなれば「見上げればアフリカ」を「見下げればニッポン」とタイトルを変更することになるかも知れない。

16回展 手賀沼公園の巨大なTシャツ 間地紀以子

作者の間地紀以子さんはファイバーアーティストと呼ばれている作家である。数々の野外美術展に精力的に参加している。また、海外でのワークショップにも出向いている作家である。



島田忠幸16回展参加作品。手賀沼親水広場入り口（ゲートスポーツ）での展示の様子。



我孫子若松交差点を望む方向から見た島田忠幸さんの作品。

今回の巨大なTシャツは「と・も・に」と題され、何点かつくられたうちの一点である。最初、嘉納治五郎別荘跡地（天神山公園）に展示場所が決められていた。展示方法は、ロープを二本の樹に縛りつけその間にTシャツを吊るすのであるが、展示に丁度良い間隔の手頃な樹が無い。あきらめかけていたら、事務局から手賀沼公園はどうかという提案があった。早速見に行くと、水辺の公園で樹木も沢山植えられていて展示に支障はなさそうである。それに、ベンチなどもあって憩いに訪れる人も多い。

間地さん他展示を手伝う作家達もこの環境を気に入る、場所が確定した。ただし、樹にロープを縛りつけるので樹木を傷める可能性がある、ということでも直ぐに許可は出なかった。

手賀沼のほとりは比較的風の強いところである。他では無風状態でもここでは常に風が吹いている。五月は風の強い日が多い。ロープを引つ張つて展示準備をする当日は特に強い風が吹いていた。同時開催中の「国際野外の表現展」（於飯能市）でも同じ巨大なTシャツが展示されている。こちらは、パイプを樹に固定して竿に洗濯物を干すかたちで展示していたが、風で巨大なTシャツがまくれ上がりパイプに巻き付くことがあった。その経験があったので、ここでは釣りに使う太いテグス糸で裾を何か所か引つ張つて、半ば固定することになった。

この作品は43人分のTシャツを縫い合わせている。今やTシャツは世界中の人達が年齢を問わず着ている。中国に「人民服」というのがあったが、政治的制服のような人民服に比べ、Tシャツは、自然発生的に世界中に普及した自由な普段着である。私はこれを「人類服」と呼びたい。この作品の意図は「と・も・に」自由と平和を求めるといふTシャツに象徴されるメッセージ表現である。作者はそういう、つながって巨大化したTシャツそのものを見せたかったと思われる。美術館なら、白い壁に貼りつけるか吊るすかして絵のように見せることができる。自然はそれを許さなかった。強い風は巨大なTシャツを風のように舞い上がらせる。ある程度

固定しようとして裾からテグス糸で引つ張るが、たちまち縫いつけられた布の方を引きちぎる。大きく舞い上がったTシャツを見た実行委員のMさんが「すばらしい、これでいいのではないかと声を上げると、それが作業を手伝っている人、見ている人全員に伝わり「いいね、いいね」という声があちこちから聞こえた。

風に巨大なTシャツをなびかせる。五月のすがすがしい季節である。鯉のぼりを思い出した人も少なくないであろう。

こうして手賀沼湖畔での巨大なTシャツの展示が始まった。風に任せると逆にロープからんだりすることが起きなかった。これは現代の鯉のぼりである。日本は鯉のぼりを揚げる文化的風習をもつ社会である。こういう作品はしぜん社会に受け入れられる。毎年「我孫子アートの散歩市」は五月に行われることになっている。毎年ほぼ同じ場所に風になびかせる作品を展示しよう、ということになった。これは手賀沼湖畔の初夏の風物詩になるであろう。

このあと、毎年間地さんの「はためく」作品が展示された。場所も同じで「我孫子アートの散歩市」開催中の目じるしにもなり、象徴的存在になった。

17回展 手賀沼公園への提案 佐治 正大

「我孫子アートの散歩市・17」では「僕の宇宙儀・片Ⅱ」と題する佐治正大さんの作品が展示された。佐治さんは、宇宙はドーナツ型をしていると考えている。展示場所の選定は見事である。卓越した庭師の目である。

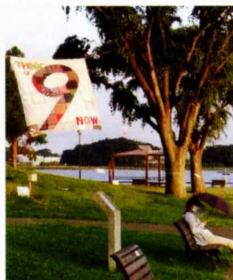
我孫子市には手賀沼に面した水辺の公園として「親水公園」と「手賀沼公園」の二か所がある。



間地紀以子16回展参加作品。手賀沼公園での展示の様子。以降手賀沼公園の同じ場所で展示している。



間地紀以子17回展参加作品。



間地紀以子18回展参加作品。



間地紀以子19回展参加作品。

手賀沼公園は生涯学習センター・図書館を含む「アピスタ」という文化施設が入口部分にあって、水辺に向かって、子どもの遊び場や運動場、原っぱと続く。水辺の近くは起伏があり樹木も豊富な自然庭園風のためか、休日はピクニックの家族連れで賑わう。

この我孫子市ではいちばん市民の集まる場所、市民の憩いの場に佐治さんは展示することにした。現代の市民社会の庭園は公園である。

展示された「片II」は、総重量5トン弱。作品は七つの断片からなりたっている。材は青糠目石と呼ばれるきめの細かい上質の御影石である。「我孫子アートな散歩市」での野外展示は一ヶ月なので仮設置となる。安全面でやや心配があったのか「のぼらないでね」という看板付きでの展示となる。しかし、そのような心配をよそに子どもたちにとっては恰好な遊び場となる。乗っかって遊ぶときちゃんと靴を脱いでいるところが面白い。足裏の感触がいに違いない。一方大人たちは作品に座って話し込んだり、もたれてくつろいでいたりしている。私は公園に来た何人かの人から「こういう作品がこの場に欲しいですね」と話しかけられた。普通、公園にはその土地その場にまつたく関係なさそうな彫刻が台座の上に乗せられているのを目にする。有名作家の作品であることが多い。

佐治作品「片II」はまるで公園の起伏の一部のように存在している。市民にとっては、昔からその場にあつたようで違和感もないに違いない。これは市民公園における美術作品の実例見本である。実例見本による提案である。

仮設置ながら、本設置での安全面について佐治さんは真剣に考えていた。石の破断面と仕上面の角の部分が危ないので、削って滑らかなアール面にするか、と話していた。こういう問題は普通本設置を進めるとき考えればよいことかも知れない。しかし、彫刻が最も活きる場に設置される時が本当の完成であるとするなら、こういうことを考えるのは当然であろう。私は、差し出が

ましいと思ったが、佐治さんに一つのアイデアを出した。

確かに石を割って出てる角の部分は危ないかも知れない。石器時代の打製石斧に似た形を成す部分もある。私のアイデアはその角が現れないように隙間を土で埋める方法である。ドーナツ型を斜めに切った形の先端部を残し（この部分は石もかけやすいので比較的大きくアールをとっている。）断片の隙間を地面と同じ土でつなぐ。断面が半円の土手をドーナツ曲面に延ばすことができる。それらの土の上に地面と同じ草が生えたら、石と土による「僕の宇宙儀」の完成である。

18 回展 手賀沼公園内の密かな造形 藤島明範「黒い水」

「黒い水」は「雨引の里と彫刻・2015」展に出品された作品で、「アートな散歩市」でも是非みなさんに見て欲しい作品であったので、無理を承知で出展をお願いしたものである。

作品に使われた石材について、同人誌「蟲と樹」に藤島さんが詳しく書いている。そこから一部を拾ってみる。

『稲井石』^{いらいし}というのは宮城県石巻市で採れる石のことです。（中略）私に石を提供してくれた『アベタ石材』が開いているホームページによれば、古くは13世紀の板碑に使われていた粘板岩で、明治以降盛んに神社等に建てられた石碑の多くに使用されているあの板状の石材なのです。」と書かれている。

この「稲井石」は石巻市で産出し、中世に供養塔ともいわれる板碑に使われた石であること、藤島さんがこの石を購入する四年前に3・11の大震災で石巻市では、3,929人の方々が亡



佐治正大17回展参加作品。手賀沼公園での展示の様子。



藤島明範「雨引の里と彫刻・2015」出品時の作品。

くなられたり行方不明になっていること。「被災地で採れた石ということを取り立て言うこともないと思う反面、これまでとは違う特別な石として向かい合わなければとも思ったりしています。」と先の「蟲と樹」に書いています。

この「黒い水」と名づけられた作品は、5mの長さの柱状の石を二本、傾斜をつけて一直線に並べている。津波を抽象化したものである。二本の石の表面には無数の真鍮棒が規則的に打ち込まれ、磨かれている。「雨引の里と彫刻・2015」展で、その数は3,929個で、3・11の大震災時石巻市の死者・行方不明者の数です。と藤島さんから説明のあったとき、私は「そうでしたか」と溜息のような返事をした記憶がある。同時に、この制作は彫刻の通常の制作とはかなり異なっている、と思った。延々と同じ作業の繰り返しそのものは造形上よくあるが、この作業は修行僧の行や長い祈りのようなものではなかったか、と想像できた。

手賀沼公園の設置の表示板には「黒い水」というタイトルと作家名があるだけの簡単な表記である。私はやはり説明文が欲しかった、と作者本人に言うと、「いいんです」という返事。先の「取り立てて言うこともないと思う」という文章を思い出した。

この北総地域は石のない土地柄で、墓石や建材、庭石以外の大きな石は見当たらない。公園にきた子ども達は傾斜のある作品の上を歩いたりまたがったり、また先端部から飛び降りたりして遊んでいる。父親もそれを助けたりしている。来場者は公園での非日常的な空間の一部として楽しんでる。

しかし、この作品は密かな鎮魂の作である、と私は見ている。だから、この作品の最もふさわしい設置場所について、当初から思っていた提案がある。その場所は、石巻市内の2011年大震災時の津波の到達点である。1000年以上前の貞観時代に同じ大津波があった、というから1000年後のための設置である。言うまでもなく説明板としての銘板は必要である。「黒い水」

は現代の墓碑、もしくは石碑である。

18回展、19回展 手賀沼公園に毛深いオブジェ ヘレン・ウォルシュ

五月になって、手賀沼公園に渡り鳥のようにやってきた生物？がいる。ヘレン・ウォルシュさんの公園の草地に設置したり、木に吊り下りたりした棕櫚の毛による造形である。我孫子国際野外美術展に出席していた作家なので、静かな布佐の森からやってきた。ところが、手賀沼公園は、この生きもののような作品の住まいとしては環境がかなり苛酷であった。

一つは風の強さで、18回展では作品を吊るしてある縄が何度も吹きちぎられた。19回展では彼女は吊り下げる縄を太くした。しかし風よりも強力な敵？がいた。子ども達である。ぶら下がって遊ぼうとする。19回展時では、ちぎれた作品の一つが1kmも先から見つかったという。ヘレンさんは子どもの遊び心を否定していない。となると彼女は更に縄を太くするだろうか。今度は樹木の枝より強い縄を絢う可能性がある。とすると、この次は市の公園課が敵になりそうである。

17回展 楚人冠邸園 自然との共作 おいかわみちよし

杉村楚人冠邸園は「澤の家」を含め毎年展示が為されている。この庭園は斜面につくられ、泉も残されている。如何にもつくりましましたという庭ではなく、自然な趣の濃い庭である。それ



藤島明範18回展参加作品。手賀沼公園での展示の様子。



ヘレン・ウォルシュ19回展参加作品。手賀沼公園での展示の様子。

だけに、作品展示の場として作家の好みに合っているのか、毎年何人かの作家が作品を展示している。

今回は、庭園の上面奥にある竹藪をいっぱいに使った展示が目された。グラフィックデザイナーであるおいかわみちよしさんの作品である。彼の作品は、昨年もこの庭の下斜面で拝見しているし、「我孫子国際野外美術展」でも見ている。地面に表意文字である漢字の熟語パネルを並べ、その一字か二字を取り換えることによって妙な意味になって、つい考え込んでしまう、といった知的な遊びを誘うものであった。

ところが、今回の竹藪の作品は文字ではない。掛軸状の迷彩模様のなかに、漫画で使われるふきだしの図柄が描かれていて、本来文字の入るところが黒丸の点々になっている。今まで文字で遊んできたおいかわみちは、ここでは文字を破棄したようである。何か話しているらしいということは分かるが、内容は全く分からない。人間がつくった文字の意味や形で表せない自然の言葉を、グラフィカルに表現するということになりますよ、ということらしい。

すべての自然物には靈魂が宿るという考え方はアニミズムと呼ばれるが、この考えは私たち自身の心の底にあるように思われる。だから、藪の中に無言のふきだし図柄が点々と散らされているのを見ると、ハッとする。今迄文字の中で遊んでいた作家が突如自然の声を感ずる、気配を感ずる、といったかすかな雰囲気を感じながら、自然の中に描いて見せた。

最も成長が早く直立して上に伸びる竹林に、私たちは強い生命力を感じる。ここ杉村楚人冠邸園の竹やぶは庭の景観の一部であるためか、根が一定以上に広がらないように囲われている。ふきだしの図柄も藪一杯に20枚ほどが点在していて、竹のやや乱れた垂直線に共鳴している。掛軸状の迷彩色はふきだしの図柄だけを浮かべる効果があるし、それらを吊るすための棒は園芸などに使われる緑色の棒を使っていて、これも竹やぶの中に埋没している。グラフィックデザイナー

らしい造形であるし、自然の無言の言葉を、自然との共作によって見事に見せてくれた。

18回展 楚人冠邸園 ダルシャナ・プラサド、野村正義

この邸園は、如何にもつくりました、という庭ではなく、趣の濃い庭だと先に書いた。「自然との共作」近頃、楚人冠の「湖畔吟」を読んだが、楚人冠は自然豊かな我孫子での田舎暮らしを満喫している。庭には、椿をはじめ好きな樹を次々と植えるし、落ち葉を掃くのも非難している。「澤の家」あたりから下は小さな澤の地形となっていて、掘ると水が湧いてくるので、何ヶ所も井戸を掘り、そこから水を引いて風呂場もつくっている。

18回展時、この庭のなかの展示で印象に残った作品が二つあった。一つは、「澤の家」から直ぐ下の泉に半ば沈めた象を形取った切り抜き作品である。作者は、象に特別な思いを持つているスリランカ生まれのダルシャナ・プラサドさん。タイトルは「spirit of the elephant II」表面に蛍光塗料が塗られていて、夜は光るそうであるが、夜は人園できないので誰も見ていない。そればかりか、この作品は直ぐに泥をかぶり、数日で見えにくくなったので、見た人が少ない貴重な展示となった。生命の源である水(泉＝水源)と象の霊(生命の根源)の合体は儂なかつた。

今一つの作品は、池のやや上に設置された野村正義さんのソーラーパネルを模した作品である。本物のソーラーパネルは、雑草が生えないように、黒いシートを敷いた上に構築される。野村さんの作品のパネルは、雑草のなかではよく知られたエノコログサの図柄になっている。シートを敷かれて命を絶たれたエノコログサに光を与えたかったに違いはない。太陽光発電は、化石燃料と違い環境を汚さないということで、エコロジーと同一視されやすい。しかし、今やソー



おいかわみちよし17回展参加作品。杉村楚人冠邸園での展示の様子。



ダルシャナ・プラサド18回展参加作品。杉村楚人冠邸園での展示の様子。



野村正義18回展参加作品。杉村楚人冠邸園での展示の様子。

ラーパネルは美しい里山に乱立気味である。自然と人間生活の理想的な共生を代表してきた嘗ての里山の景観を壊しつつある。

エコログサとエコロジーの語呂が似ているのは面白い。太陽光発電のエコロジーの方はエコノミーの方に似ているようである。

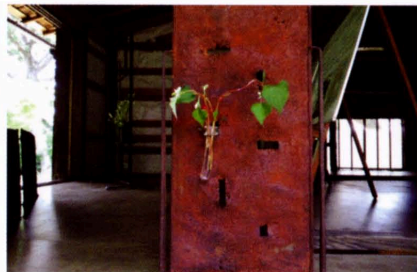
16回展 楚人冠邸園 澤の家 松岡信夫

杉村楚人冠邸園に「澤の家」と呼ばれている古風な家がある。説明板によると、大正十一年（1922）に建てられ、大正十三年（1924）杉村一家がここに移住するまでは杉村家の別荘であった。移住後は、杉村の母親の住まいとして使われた。この家は崩壊状態だったそうで、市の保存方針に従って、戦後の増改築は除かれ、昔の姿に修復復元されつつある。

この家も我孫子の名大工佐藤鷹蔵の建てたものである。まだ壁などの内部の修復は為されていないし、畳も入っていない。したがって、旧村川別荘母屋のように中に入ることはできないが、外から幅広い縁側に腰掛けることくらいはできるし、古い家の雰囲気を感じることはできる。

この手の古い家は作家の感覚に合うものと思われ、16回展では鉄の鍛造作家、松岡信夫さんが作品を展示した。作品は、何十年も雨風にさらされ、穴があくまで錆の進んだ鉄板が材料で、長い時間の経過を感じさせる造形である。古い家の存続した時間と、自然の酸化作用の時間が合体した展示である。その意味で、名大工の建てた古い家の良さを意識するに恰好な展示であった。

作品は広い縁側に展示されているが、そこに腰掛けて傍らの作品に触れたり、庭の景観をゆっくり味わうことができる。もともと縁側はくつろぎと客との交流の場であるが、この縁側の広さ



松岡信夫16回展参加作品。杉村楚人冠邸園澤の家での展示の様子。

は更にそれを強調しているようである。この空間は、展示とともに、作家と作品を見に来る人との交換の場としても最適である。普通、作家は自分の作品を少しでもよく見せる空間を求める。いわばよい舞台を求めたがる。確かに良い舞台には違いないが、ここでは、作家のアトリエを訪ねて作品を見せってもらうような関係が生まれる舞台でもある。美術とより親しむ空間として旧村川別荘母屋とも似ている。



「影の棲家」間地紀以子／工藤俊文19回展参加作品。杉村楚人冠邸園澤の家での展示の様子。

19回展 「影の棲家」間地紀以子／工藤俊文

「澤の家」が修復途中なので影が棲みやすいのか、等身大以上にプリントされた影の立体像群と、黒い布を巻かれた藤蔓の怪しげな曲線の構成が爆発しそうな迫力。



「澤の家」写真は19回展での作品展示の様子。



杉村楚人冠記念館は楚人冠の邸宅跡で、杉村楚人冠邸園の中にある。記念館は入館料が必要だが、邸園は無料。



18回展「月の兔」ダルシヤナ・ブラサド。兔には銀杏の木の厚い皮が貼られている。

15 回展 旧村川別荘母屋 畳敷ギャラリー

「我孫子アートナ散歩市・15」で、旧村川別荘母屋では、私を含め3人の作家がそれぞれ一部屋づつを使った展示がなされた。八畳、六畳、四畳の三つの部屋があつて、私は六畳の部屋を使い、大きな椿の根を彫り込んだ作品を一点だけ置いた。この作品は以前から一度畳の上に展示してみたい、と思っていたからである。それが興味深い発見につながる。

畳の上の展示は、作品を見る人と作品との距離が、心理的にも大変近くなることに気づいた。作品が人と同一平面にあつて座つて見る。自然に手が出て作品の表面を撫でる。「火鉢みたいだ」と昔の生活を思い出した人もいた。それは、美術館やギャラリーでの陳列台上の作品の特別なあり方とは随分異なる。同じ平面上にある作品は、人との関係において日常品と変わらないし、作品そのものも特別な存在ではなくなる。

今一つ、床座の空間で気づいたことは人々がかなり長居することである。作家がいれば作品やその制作について話がはずむ。そして、伝統的な古いしつらえのせいなのか、いい空間でいい時間を過ごすことができる。

この旧村川別荘母屋は、他の別荘とはかなり異なつた成り立ちをもっている。この別荘をつくつたのは西洋古代史学者の村川堅固であるが、普通なら新築するところを我孫子宿本陣の離れを移築している。大正十年（1921）村川堅固は畳から建具を含め、510円で買っている。解体、移築は新築よりお金がかかる。2,500円を投じたという。（我孫子市史 近現代編）村川堅固は、よほどこの江戸期の瀟洒な雰囲気を残す建物が入つたのであろう。現在それがそのまま残されているのは実に幸運なことである。

また、ここは環境がすばらしい。樹木や竹藪の緑、鳥の声、こういう場、空間を味わうには美



16回展の旧村川別荘母屋での展示の様子。

術展は恰好な機会である。人々はこの建物、空間をゆつくり味わいに來ることがができる。この別荘ならではの魅力である。



旧村川別荘の母屋（右）と新館（上）。新館前の円卓は19回展「ちやぶダイブ」によるもの。



17回展「土から生まれ、土に還る」草細工展 山本あまよかしむ、蘭草（畳）の上に草細工がぎつしり。



18回展 吾妻勝彦展。大正デモクラシー、その時代の祝祭の雰囲気。



18回展 島久幸／沼尻昭子展 島さんの作品は薄い銅板を樹木や廃材に包み込む超絶技巧。沼尻さんのインスタレーションは編集に関わつた古い我孫子の写真を障子の棧にそつと差し込む、びつたり時代にも会いすぎています。



19回展 杉原あつ展。



19回展 石川美穂子／野村正義展。



19回展 いつち治展。

16回展〜19回展 けやきプラザ 第二ギャラリー アトリエグリユ

福祉施設である「けやきプラザ」にはギャラリーらしいギャラリーが存在する。ここはギャラリーとして設計され、つくられただけに、彫刻用の台座はないが、備品は揃えられ、保安面も行き届いている。私はこの地域で、最もギャラリーらしいのではないかと思っている。

ここでの展示は、16回展では柏の画廊アトリエグリユにお願ひすることになった。画廊として「我孫子アートな散歩市」に参加してもらったのである。したがって、アトリエグリユの展示会企画をやっている綾康文さんが展示企画を進めてくれた。作家は6名で、アトリエグリユにかかわっている作家の中から、柏、我孫子に在住する作家を選んだ。展示会のタイトルは「作家の証・アトリエグリユセレクション」とされた。

プロの作家のなかには、地元で展覧会をまったくやらない人もいる。アトリエグリユでは、今までそういう作家達の作品を見せる機会をつくってきた。今回のセレクション展では、6人のうち4人が我孫子では初の展示となる。したがって、綾さんは作家の作品だけでなく、各作家のメッセージ付きの略歴と、写真家の足立紳一郎さんが撮った各作家の写真を用意した。できるだけ見る人にわかりやすく、と考えてのことである。各作家の写真も、よくその人物の性格や雰囲気をとらえていて好評であった。その意味では6人でなく7人の作家展であった。

また、この展覧会の作家の一人でもあるが、アトリエグリユのオーナーでもある天野田鶴子さんが、作品の展示構成を担当した。プロの画廊がプロの仕事を見せてくれた。会期中ギャラリーには多くの人が訪れ、その対応にも親しみがあつた。

ギャラリートークも行われ、4人の作家が15分ずつ話をした。ギャラリートークはここでは珍しいことであろう。ギャラリーが人で埋まった。また、作家の仲間や知人が東京からも来てくれ

たし、近隣の作家で、はじめてこのギャラリーの存在を知った人も多かった。

けやきプラザギャラリーのオープンには2006年の8月である。私は十分活用されなければもったいない空間だと思う。

18回展 我孫子市民図書館ウィンドーの風刺イラスト おいかわみちよし+林慎一郎

アビスタ入口の右側に、縦に細長く仕切られた図書館のウィンドーが連なっている。その10枠を使って展示されたのが「BLEND」というタイトルの作品で、ランプと金正恩の特異なヘアスタイルの顔を BLEND（混合融合）したという風刺作品である。この作品は前年、「我孫子国際野外美術展」に出展されたものであるが、野外よりもこの図書館のウィンドーの方が場を得ている。ウィンドーの縦の棧が映画フィルムのごま送りのような効果を与えているからである。

ちょうど、ウィンドー前に並んでいる人達がいた。この人達もブレンドされてしまった感がある。美術館では見られないインスタレーションの妙味である。

16回展 志賀直哉書齋 佐治正大

志賀直哉は大正四年（1915）九月に、柳宗悦のすすめで我孫子に住むことになった。その住いは今は無く、跡地には大正十年（1921）秋に、地元の名大工佐藤鷹蔵が造った茶室



19回展けやきプラザ第2ギャラリーでのギャラリートークの様子。



16回展での展示の様子。



おいかわみちよし+林慎一郎18回展参加作品。アビスタの図書館のウィンドーでの展示の様子。

風書齋が残されている。この書齋は跡地の西50mほどのところに、二階家と呼ばれていた「上の書齋」とともに移築されていた。1958年から津田尚という人が家族で住みはじめ、数年後「上の書齋」の方に移り、茶室風の方は隠居所となり大切に使われてきた。1987年跡地の元の位置に再移築して復元された。(我孫子市史研究12)

佐藤鷹蔵のことを知ったのは、「我孫子アートな散歩市・15」の準備段階で、旧村川別荘新館にあるリーチデザインの椅子の製作者として知った。その後、この名工が先に述べた「澤の家」を建てていることも知る。更に「我孫子市史」等を読んで、柳宗悦の書齋をはじめリーチの工房等も建て、リーチデザインの家具製作も行い、白樺派の人達とのかかわりを知る。

志賀直哉は大正十二年(1923)三月京都へ発つまでの七年半我孫子に住んだ。その間代表作となる短編小説を多く書いている。なかでも、父親との確執を描いた中編小説「和解」は我孫子が重要な舞台となっている。自分の心の動きを克明に描いていて、ここまで見つけて書くものと驚いた記憶がある。

「和解」の発表が大正六年(1917)十月、手賀沼の穏やかな雪景色を描いた「雪の日」の短編は「和解」の後の作。

茶室風書齋は大正十年(1921)秋につくられた。京都へ発つまで一年半ほどしか使われていないことになる。「暗夜行路」はここで書かれていたかも知れない。

この書齋は確かに茶室風ではあるが、天井が舟形になっていて高い。上に抜ける上昇感があつてドームの空間に近い。「和解」後の志賀直哉の気分が反映しているのではないかと想像したくなる。

残された小説家の書齋は、いわば小説家の記念碑である。志賀直哉は、自分の文学碑や文学館はつくるな、と遺言したが、幸運なことに鷹蔵の傑作としても残されたようである。

この建物は志賀直哉邸跡地を含め、我孫子市が管理している。書齋は保管のため、週に二日(土、

日)午前10時から午後2時まで風通しのため開けられる。日曜日が雨の場合のみ翌日の月曜日に開けられる。その間だけ室内を外から見るができる。その条件内で展示が許された。

私は逆にこれは面白いと思つた。風通しの日時のみ人々に美術作品を見せよう、ということとは展覧会運営の常識に反している。それは、もはや人々に見せるのが第一的ではなくなる。それならば、この書齋は「小説の神様」といわれた志賀直哉への敬意の表現の場、と考えればいいのではないか。つまり作品は志賀直哉への捧げものであり、ついでに人々に見せようということにする。こういう場合は神社や寺のようなものだと思つた方が似合っている。作品を見せるのは秘仏の開帳に近い。

この考えのもとに、会期が迫っていることもあつて、協力してもらえる作家は友人の彫刻家、佐治正大さんしかいない、と会議中に電話で依頼する。かつて第一回相島美術展(2002年我孫子市布佐)で母屋の座敷に展示された作品を所望した。黒御影石の作品で、フォルムを極め、鏡面にまで磨き上げた抽象彫刻である。この作品に、私は志賀直哉の文章にどこか通じるものを感じた。

実際に展示された作品は、予想通り茶室風書齋にぴったりで、この空間のためにつくられたようである。低く畳の上に置かれた2m10cmの長さの緩やかな逆反り曲線を持つ作品が、見事に舟形天井に呼応している。茶室風という形式にとらわれ、今まであまり意識していなかった空間がより明確に見えてきた。

「我孫子アートな散歩市」では、今後毎回参加作家が順番に志賀直哉への捧げもの作品、今風に言えばオマージュ作品を展示しよう、ということになった。こうして祭りに神社があるように、「我孫子アートな散歩市」祭りを象徴する格好な場が見つかった。これも我孫子ならではのことである。



我孫子市によって再建された志賀直哉邸跡の茶室風書齋。



茶室風書齋内部の舟形の天井。展示作品は17回展での杉原あつ、関谷俊江の作品。



佐治正大16回展参加作品。志賀直哉邸跡の茶室風書齋での展示の様子。

姫井 容子



我孫子にこんな素敵な所があったの？何年も住んでいたのに……。開催中、毎日そんな言葉を聞いた。隠れ家のような旧村川別荘は「第15回我孫子アートな散歩市」に初参加した。9000坪の敷地の手入れも行き届いて、村川堅固と堅太郎の歴史をボランティアのガイドが行っている。

緑に囲まれたこの場だから声をかけられ参加して頂けた6人の作家……。いづち治（パートドベール）、小泉伸子（ファイバーアート）、佐治正大（石の彫刻）、中津川督章（木の彫刻）、中野彩（陶芸）、松岡信夫（鉄）、それぞれの味わいがこの場を盛り上げてくれた。格子戸をくぐって湧き水の池のそ

ばで小鳥達（陶芸）が出迎え、竹林を登って母屋の玄関から床の間に凜とした風が流れ、新館の大テーブル、昔は手賀沼がながめられた窓辺にもほっとする良い存在感のものが収まって、アートのご馳走が並んだ。村川氏が想いを込めた建物にオシャレな時が蘇って来たように思えた。

会場に何度も足を運んでくれた人、自転車でマップを持って訪れる人、作品を静かに味わってくれる人……。二週間の開催中人の足は途絶えなかった。こんな場が我孫子にいつもあれば、お買い物ついでにランチして落ち着いた別荘にアートが入って人を迎えられる。文化人が愛した我孫子の地形の面白さと贅沢な時間が身近に味わえる気がした。

（第15回我孫子アートな散歩市ホームページより）

姫井容子（ひめいようこ）我孫子アートな散歩市企画委員・コーディネーター

装丁・デザイン — マエノマサキ

写真 — 中津川督章・マエノマサキ・姫井容子

文 — 太田安則

関谷俊江

中津川督章

姫井容子

マエノマサキ

編集 — 綾康文・マエノマサキ

発行 — 我孫子手づくり散歩市

我孫子アートな散歩市企画委員会

千葉県我孫子市若松一三六一—

20回を迎える我孫子アートな散歩市

発行日 — 令和元年九月七日